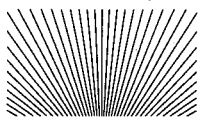


ザイールの崩壊と東部諸州



澤田昌人

1 紛争勃発直前のザイール、主に東部の状況

旧ベルギー領コンゴは、1960年に独立し71年にザイールとその名を変えたが、26年後の5月ふたたびその名を変え、コンゴ民主共和国となった。97年革命の評価は、後世の歴史家にゆだねるしかないが、この国に生きた人びとの生活が紛争前にはどのようなものであったか、紛争後にどのような変化の兆しがみられるのか、簡単に記しておきたい。

私はザイール紛争勃発からその終了直前までをすでに別稿（「ザイール紛争の背景」〔『アフリカ学会会報』第28号 1997年3月〕19～35ページ）にまとめているので、本稿ではザイール紛争の経過について説明しない。ザイールはこの5月に崩壊したので、その前をザイールと記述し、その後をコンゴ（本稿ではブラザビルを首都とするコンゴ共和国にはまったく触れないので、「コンゴ」はザイールの後身、コンゴ民主共和国を指す）と記述する。

私は、1985年から95年までの間に計6回、主としてザイール東部で人類学的調査をするためにザイールに入国した(図)。92年、93年の2回の滞在では、東部の主要都市以外にも、首都キンシャサでそれぞれ2週間ほどすごしている。

1. インフレと通貨不安

紛争勃発の2カ月前、1996年8月はじめ頃、1米ドル=4万新ザイル（ザイールの通貨単位、93年10月には1新ザイル=300万旧ザイルというデノミをおこなっていた）であったが、ザイール紛争終了直前の97年5月には1米ドル=15万～18万新ザイルであった。為替レートに連動して物価も上昇しているが、このインフレ率は近年としては標準的でそれほど悪い数字ではない。91～94年には、各年数千%から1万%、あるいはそれ以上のインフレ率を記録しているのである。

ザイール貨の価値がこのように急速に暴落するため、ザイール東部に限らず、首都でも1992年頃より米ドル札が通用しはじめ、95年には地方都市でもほとんどの用事がドルで済んだ。私の調査地はザイール東部でもたいへんな辺境地帯だが、それでも村の住民はすでにドル札を知っていた。

2. 兵隊による搾取

ザイールの経済活動を阻害していたのはインフレだけではない。ブニアのザイール人商人が1995年にゴマまでタバコの葉をトラックで運んだ経験話を話してくれた。ゴマ周辺には前年ルワンダから流入した難民キャンプがいくつもできていたが、その警備の名目で大統領特別師団を含む多くのザ

ザイール東部の略図



イール兵が駐屯していた。彼らの収入源は国連や援助関係者らから通行料などを取ることであった。そのためにゴマ近辺だけで10カ所近くの検問所が設けられていたという。くだんのブニアの商人は、検問の度ごとに数十ドルの金を要求された。このため儲けはほとんどなく、もう二度とゴマへは行かないと言っていた。

この時期にザイール東部を旅した知人のザイール人は、ゴマからブテンボまでバスに乗ったが、ザイール兵の検問の度に乗員全員の荷物が一つずつ検査され、その度にお金を取られたという。またザイール兵は、ルワンダ難民が乗って逃げてきたバスを没収して、そのバスを使ってゴマ―ブテンボ間の旅客運送業をおこなっていたが、このバスに乗るとそれほど検査は面倒ではなかったという。

3. インフラの崩壊

1995年当時、調査地の小学校の先生の給与はす

でに2年以上も未払いの状態であった。それ以前もときたま給与が支払われていただけであった。これはザイール全土に共通する状況であった。先生たちはその窮状を児童の親に訴え、児童の親が毎学期のはじめに現金か、ヤシ油を小学校におさめることになった。それらを先生たちが分配して生活の足しにするわけである。父兄による先生たちへの直接援助は、ブカブでもキンシャサでもおこなわれているとのことであった。ザイールの教育は、ただでさえ貧しいザイール人が自腹を切つて維持していたのである。

調査地近辺の町に限らず、ブニア周辺でも医療活動はすでにカトリックかプロテスタント系ミッションのみが担っていた。調査地周辺のミッションの診療所はごく初歩的な治療しかできず、盲腸の手術さえ数十キロ先の町まで患者を運んでやっと受けられるのであった。それも運良く車に乗せてもらえればのことであった。

1985年にザイールをはじめて訪れてから、ザイール東部の道路は年々悪くなっていった。道路を補修する公的機関はまったく仕事をしないか、通りかかった車からお金を徴収してはじめて仕事にとりかかるのであった。93年になると公的機関による道路補修はまったくおこなわれなくなった。ゴマ空港から市街までの舗装道路上で一般の市民らしき若者たちが、車を止めて道路補修の名目でお金を取っていたのもこの年であった。同じ年首都キンシャサでも失業者らしき若者たちが同様のことをやっているのを私は見ている。都市にはだんだんアナーキーな状況が生まれつつあった。

1995年私は調査地の村から役所に出頭するため、森の中の道を60%ほど自転車で行ったことがあるが、数台のトラックが立ち往生しているのに出会った。トラックの運転手たちによるとこの道を通り抜けるのに4日から約1週間かかるという。



熱帯林のなかの道路。まったく手入れされておらず、泥だらけ、穴だらけで車の通行は難渋をきわめる。自転車が一番早く目的地に着く。

先に進むとさらに道は悪く、次の60㍍を通り抜けるには2週間を要するとのことであった(写真)。

この年はこの道を通る自転車を大変多く見かけた。トラック輸送があてにならなくなったので、自転車で物資を輸送しはじめたのである。彼らはイシロとブニア、あるいはブテンボとを往復している零細商人たちで、イシロから主にヤシ油や米を運び、塩や石鹼やサンダルや布などを仕入れてイシロに戻るのである。ヤシ油を入れた20㍍入りのプラスチック罐4~6個を自転車の後ろに縛りつけ、炎天下自転車を押しながら丘を越え、泥の海や大きな穴ぼこをさけて自転車を操る彼らはいつも疲れ切った顔をしており、まさに命がけの旅をおこなっているのであった。彼らは夜になると野宿して生活のための旅をつづけるのである。調査地付近でも近年2名の自転車乗りが、過労から斃死したという。地元の役人や兵隊たちは検問所で彼らからもお金を巻き上げる。それを避けて検問所を夜通過する自転車も多かった。毎日日没後に月明かりの中を走っていく自転車を何台も見た。

1995年になると東部ザイルからキサングニへはまったく到達できなくなった。90年頃までは(巨大な泥の沼と格闘しながら)四輪駆動車で丸一日、大型トラックで2、3週間で着いていたのだが、四輪駆動車も通れなくなったのである。東部ザイルからキサングニへの食糧輸送は息の根を止められ、航空機による輸送に頼るだけとなった。当然キサングニでの食料は高騰し、多くの市民が郊外に移り住むなどしてそこで畑を耕し自給自足の度合いを高めていったという。

カビラがモブツ体制の打倒を掲げたときに、彼の発言が人びとの心をうったのは、苦い思いを抱いて生きてきたザイル人が多かったからである。私の調査地周辺ではザイル軍に加入する者ほとんどと現われなかったが、AFDL(コンゴザイル解放民主勢力連合)には若者が3名も参加したという。死ぬかもしれないが、彼らにとっては自分の尊厳を全うできる道だと感じたのかもしれない。AFDLの蜂起は、モブツ体制が崩壊する可能性を想像もできなかった人びとに、大きな希望をあたえたことを強調してもしすぎることはない。蜂起は、まさに物心ともに絶望的な状況の中で始まったのであった。

2 AFDL進撃中のザイル東部での暮らし

ブニアに住む友人によれば、ベニをAFDLが制圧してから、ブニアに攻撃をしかけるまでの3週間あまりの間に、ザイル兵はブニアのミッションの施設、主だった商店と商人の自宅を徹底的に略奪したという。なかには燃やされてしまった家もある。ブニアの市民の多くは、ザイル兵の略奪を恐れ、またブニア攻防戦に巻き込まれるのを避けるため、郊外に避難して思い思いの場所に潜んでいたという。ザイル紛争は一般に市街戦によ

る町の被害よりも、戦闘が始まるまでの間におこなわれた略奪の被害の方がはるかに甚大であったが、その中でも3週間続いた略奪の犠牲となったブニアは全土でもっとも被害の大きい町といえるだろう。ブニアはザイール東部におけるプロテスタント系ミッションの基地であったが、ブニア解放後半年近くたった5月下旬になってもミッションは活動を再開できていない。

私の調査地周辺では、ザイール兵が敗走してくるとの知らせを受け、人びとは熱帯雨林の中に3週間ほど隠れていた。12月頃のことである。カトリック・ミッションの外国人神父や外国人修道女たちはそのようなときも、国外に脱出することはなかった。敗走するザイール兵はカトリック・ミッションの車、診療所の設備などを略奪した。調査地周辺のプロテスタント系ミッションで働く友人のザイール人は、ザイール兵がミッションを略奪しに来た際に発砲をうけ、ナイフで刺されそうになったが、けがはなかったようだ。

3 AFDL制圧後のザイール東部での暮らし

東部ザイールは首都キンシャサが陥落するずっと前からAFDLの統治が始まっていた。そこでの人びとの暮らしがどのように変わったかを紹介しよう。

1. 治安の改善

ブニア、ブテンボや私の調査地からの知らせに共通している点は、ザイール兵が敗走したために住民が兵隊を恐れてびくびくしながら暮らさなくてもよくなったという点である。AFDL兵はザイール兵のように日常的に人びとを拘束したり、殴ったり、金品を奪ったりしないようである。以前は、ザイール兵による殺人、強姦は日常茶飯事と

は言わないまでも、ときどき耳にすることであった。

2. 汚職の減少

AFDL占領下で汚職が根絶されたわけではもちろんないが、劇的に減少していることは確かなようだ。私個人に届く知らせは、治安の改善とともに汚職の減少についても必ず触れている。

キンドゥが制圧されたとき、ザイール兵の略奪を免れたジュースのケースをAFDL兵が警護していたが、のどの渴いた通信社の記者が小銭をだしてジュースを譲ってもらおうとした。AFDL兵は金を受け取るのを拒み、ジュースを渡さなかったという。当たり前のことのようにあるが、ザイールにおける兵隊の行状を知る人はこの話を信じがたい気持ちで聞くであろう。当の記者自身も自分の耳をうたがったようである。

報道によればブカブに住むレバノン人商人も、国境で払っていた賄賂がなくなりそのかわり関税を払うようになったと述べている。そのおかげでブカブの商品の値段は下がったにもかかわらず、商人の利益は上昇しているという。ゴマからブカブへフェリーに乗り、魚を売りに行く女性の談話として通信社が伝えるところによれば、フェリーのなかで必ずザイール兵にいくらかの魚を没収されたものだが、AFDL制圧以後は何もとられないと言う。その女性は「こんな時代がいつまで続くのかしら」と心配しているくらいである。

3. 輸送手段の改善

キサンガニからブテンボへの道路は最近まで完全に通行不能であったが、キサンガニ攻防戦に備えてAFDLが捕虜を使って改修したために四輪駆動車であるならば通れるようになったという。ブニアからブテンボに直接マイクロバスが走っている

との知らせも受けた。この道の途中には名高い難所があり、1985年以来ずっとマイクロバスが通行できるような道ではなかったのだ。ウガンダに住んでいるザイル人の知らせによると、ベニからブニアまでたったの4時間で着くという。以前は泥濘の道のおかげで3日かかっていたのである。

4. ザイル東部経済の活況

首都キンシャサが制圧される何カ月も前に、ザイル東部では経済的な活動が活発におこなわれつつあった。ブテンボは、ザイル兵が略奪せずに撤退したので、戦争の被害はまったく受けていない。この町はウガンダ国境に近く、そのうえAFDLによる占領後ウガンダとの国境がすぐ開いた。そのためウガンダとの交易で、ブテンボはたいへんな活況を呈しているという。

4 新生コンゴと国際社会

ザイルのインフレは1990年ころから悪化しはじめ、モブツと野党との対立が激しくなった91～92年に一段とひどくなった。IMFによれば89年のインフレ率は平均56%であったが、90年に256%、91～93年に2500～4500%、94年に1万%、95年に370%、96年に657%であった。

最近の推定では首都の陥落直前の1997年4月に年率換算で900%のインフレを記録したが、コンゴの新政府が誕生した5月には-20%と落ちつく兆しを見せている。

政治デモはコンゴ成立後早い時期から禁止されているが、政党活動そのものは禁止されていない。出版の自由は今のところ保証されているようで、カビラに対して厳しい批判を繰り返す新聞がキンシャサで多く見られるという。モブツ時代にはモブツ体制を非難する新聞社のオフィスが夜

中に不審火で炎上したり、野党指導者の家にロケット弾が打ち込まれて家が吹っ飛んだりしていたものであった。

日本の外務省はキンシャサ陥落前の4月28日に、アフリカ担当の外交官を複数ゴマに派遣してカビラと会談させている。外交団は通信社の質問に、AFDLの経済的、政治的目標を確かめに来たのであり、私企業による投資についてカビラがどのように考えているのかを尋ねに来たのだと答えたという(1997年4月28日付、ザイルのゴマ発、ロイター)。

コンゴ国内で虐殺されたといわれるルワンダ難民の調査を、先進諸国の後押しもあって国連が開始しようとしているが、コンゴ政府と意見が対立している。コンゴ政府による難民問題についての見解を紹介しておこう。

コンゴ政府の外務大臣カラハはつぎのように語ったと伝えられる。

「誰が、ルワンダ難民を旧ザイルに押し込んだのか？ フランスが派遣した外人部隊のせいではなかったか？」「難民のなかの武装勢力の武装を解除しようとした国はどこにもなかったではないか。武装勢力を難民から分離しようとした国もなかったではないか」「ルワンダ難民のなかの武装勢力は大勢の罪もないコンゴ人を殺してきたのではないか」「AFDLは内戦中に3回一方的に停戦をおこない、難民の帰還を促してきた。また100万人近い難民がすでにルワンダに無事帰還しているし、AFDLは帰国を支援してきた」("A town meeting in Washington about Congo," *AfIS News Service*, July 3, 1997)。

カラハは難民虐殺の事実関係については言及していない。しかし、コンゴにおける難民問題は、難民キャンプからルワンダへ越境攻撃がおこなわれているのを知りながら援助を続けてきた国際社会にも責任があるのは明らかである。その頃から

ルワンダやザイールのツチ系住民が、国際社会の行動に対して不快感を抱いていたことをカラハの発言はよく表わしている。国連や先進諸国は反省すべき自らの責任問題を棚上げにして、難民虐殺問題にだけ調査の対象を絞ろうとしている。調査団を受け入れなければ、コンゴへの援助を開始しないという脅しもちらつかせている。しかし、コンゴのかたくなな態度の背景に、自らの責任を認めようとしないう高慢な国際社会への不信感があることをわれわれは知るべきであろう。

5 アフリカ史のなかのコンゴ

南アフリカはカビラ政権をことあるごとに弁護してきた。政権発足当時、アメリカやフランスが民主的な選挙の早期実施をカビラに迫っていたとき、マンデラはつぎのように痛烈に皮肉った。「私は本当に驚いた。あのモブツ独裁政権を30年間も支えてきた西側の国々が、今度はすぐさま民主主義を確立せよ、と言っているのだから」。

コンゴは独立直後に鉱物資源の豊富な地域の分離独立問題などをきっかけとして、たいへんな内乱を経験した。そして東西冷戦のなかで、コンゴを西側につなぎ止めるためにモブツがCIAの支援を受けて、大統領となった。モブツの公金横領と、苛烈な独裁政治を西側は容認し、それが現在の巨大な対外債務と国民の貧窮を招いた。冷戦後は、民主化の動きがあり、アメリカ、フランス、ベル

ギーの3カ国がモブツの追い出しをはかったが、これもフランスがモブツ支持に転換したことで、とん挫した。独立以来この国の政治は西側の思惑に翻弄され続けてきたのである。

今回のコンゴでの政変劇は、西側諸国のイニシアティブによるものではなく、ウガンダ、ルワンダ、アンゴラ、南アフリカなどの周辺諸国の介入で実現したものである。ルワンダの実力者カガメは、7月9日に『ワシントン・ポスト』とのインタビューのなかで、当初からルワンダはモブツ体制の打倒を考えていた、と明言している。その過程で起きた難民虐殺問題をはじめ、さまざまな問題が今後どのような結果をもたらすのかは予断を許さないが、今回の政変はアフリカにおける政治史上画期的な出来事であるといつてよい。すでにコンゴは南部アフリカ諸国との経済的協力関係をすすめていく意向であると伝えられているし、ウガンダのムセベニ大統領は、東アフリカと南部アフリカを統合する共同市場を構想しているとも伝えられている。これらの指導者は、一つの経済的共同体としてアフリカの自立をめざすという戦略を持っているようにも思われる。ルワンダ、ブルンジにおける政治的な民族紛争と、それに連なるザイール紛争の過程で人びとは多大な犠牲を払ってきた。失われた多くの人命を慰める鎮魂のすべはないが、これらの犠牲の上に、アフリカの新しい時代が開かれようとしているのかもしれない。

(さわだ・まさと/京都精華大学)